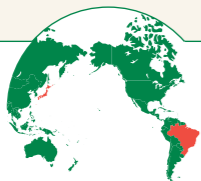


ブラジルで
心の豊かさを育む



地球の反対側、ブラジルのリオデジャネイロ。2014FIFAワールドカップの決勝戦の地として注目されたが、市内にはまだまだ貧困地域も多い。親がアルコールや薬物に依存するなど、不安定な家庭環境で育つ子どもたちもいる。JICAとの情報交換を通じてこの事実を知った埼玉県教育委員会は、現地の子どもたちの心の豊かさを育む協力ができないかと考えた。

そこで職員を現地の教育施設に派遣し、パソコンやプレゼンテーションの技術、紙人形劇の作り方などの指導方法を伝えることに。子どもたちの表現力を磨くためだ。

また、人との付き合い方や健康的な生活習慣を学んでほしいと、「ありがとう」や「手洗い」など50の言葉を使ったカルタを作成。イラストは、ブラジルの子どもたちと埼玉県立総合教育センターの石川薫教育主幹。教育を通じて、埼玉県とブラジルの絆が深まっている。

さらに現地の教員に対して埼玉県で研修を行い、県内の学校で体育や音楽など実際の授業を見学してもらっている。「日本の子どもたちが真剣に取り組む姿勢に感動した様子。ブラジルの研修員との交流は、生徒たちの国際理解にもつながっています」と埼玉県立総合教育センターの石川薫教育主幹。教育を通じて、埼玉県とブラジルの絆が深まっている。



ブラジルで紙人形劇を披露する石川教育主幹



埼玉県内の小学校でカルタを楽しむ研修員と児童。お互いに忘れられない1日になった

マラウイで造られた風力発電装置について、青年海外協力隊OGの新江梨佳さんの説明に聞き入る教員



入り口近くの巨大な展示物に引き付けられる。展示内容は定期的に変えている

ライト」と呼ばれるこの展示スペース。「グローバル化が進み、日本は世界の8割を占める途上国とも密接な関わりがあります。子どもたちにも途上国の生の姿を伝えていかなければなりません」。そう話すのは、JICA A東京で研修中の県立杉戸農業高等学校の仲山嘉彦教頭。2006年から、埼玉県内の教員がJICA Aに学校教育アドバイザーとして出向し、国際協力と教育現場との連携に力を注いでいる。仲山先生は7代目だ。

子どもたちに正しく現状を伝えるためには、まずは教員が途上国のことを知らなければならぬ。そこでセンターでは、JICA A職員やJICAボランティア経験者を講師に招いて指導方法の研修を実施することに。また、JICA Aが作成した「国際理解教育実践資料集」では、埼玉県の教員が監修として学習の狙いやポイントをとめ、学習指導要領との関連も記載。全国の学校に配布され、授業に活用されている。

教員の意識を変える
きっかけづくり

JICA地球ひろばサテライトの誕生も、この連携の一環だ。

世界とつながる
拠点づくり

子どもたちに視野を広げてもらいたいと、国際理解教育を推進する埼玉県教育委員会。特に今、力を入れているのが、教員が開発途上国に目を向け、子どもたちに伝えていくきっかけづくりだ。

子どもたちに伝えるために
途上国を知る

埼玉県行田市にある埼玉県立総合教育センター。入り口を抜けると、巨大なオブジェが迎えてくれた。大人の身長を超えるほどの弁当箱の模型。エビフライ、サケ、卵焼き…。それぞれのおかずには原産国名が記され、そのほとんどが開発途上国だ。

その次に、目に飛び込んできたのが巨大なトイレ。中をのぞくと、「世界中で26億人（5人に2人）がトイレなどの適切な衛生施設をもっていない」と書かれている。そもそも教員研修用のこのセンターに、なぜこのような展示があるのだろうか。

通称「JICA地球ひろばサテ

今から5年前、埼玉県教育委員会の職員約20人がJICA Aとの定例会でJICA地球ひろばを訪れた時のこと。紛争や児童労働に関する展示に全員が目を奪われた。こういった展示をセンターに置けば、教員の途上国への関心が高まり、授業のアイデアも生まれるのではないかと。当時の学校教育アドバイザーの羽田邦弘先生が橋渡し役となり、2011年、JICA地球ひろばの協力を得て開設にこぎつけた。

このセンターでは、多い時で1日約1000人の教員が研修を受けるため、特に人通りの多い入り口付近を展示スペースに選んだ。県立川口工業高等学校の福田哲也先生は、「川口市はベトナムや中国などの外国人の生徒が多く、世界各国の文化や習慣の違いの指導



途上国の子どもたちが運ぶ水の重さを体験。展示物にはさまざまな工夫が凝らされている



埼玉県